

# アドホックカテゴリーにおける検索誘導性忘却

○村上ゆめ<sup>1</sup>・中條和光<sup>2</sup>

(<sup>1</sup>広島大学教育学部, <sup>2</sup>広島大学大学院教育学研究科)

検索誘導性忘却 (retrieval-induced forgetting) は、特定の情報の検索によってその他の情報検索が抑制されるという現象である (月元・川口, 2004)。この現象は検索経験パラダイム (retrieval-practice paradigm) によって検討されてきた。

検索経験パラダイムでは、まず参加者にカテゴリーと事例の対のリストを学習させる。学習後に、半数のカテゴリーの事例の一部について検索練習を行う (Rp+条件)。この時、検索練習しなかった事例を Rp-条件とする。検索練習を行わなかった残りの半数のカテゴリーを統制群とする (Nrp条件)。その後、すべての対についてカテゴリー名と事例の頭文字を手がかりとする事例の再生テストを行う。再生テストにおいて、Rp-条件の再生成績が、Nrp条件よりも低くなるならば、検索誘導性忘却が生じたとされる。

これまで検索誘導性忘却は、カテゴリーと項目、また項目同士が意味的に強く結びついている分類学的な意味カテゴリー (コモンカテゴリー) で検討されてきた。しかし、問題解決の際に目標に応じて生成され、項目間の意味的な関連が弱いとされるアドホックカテゴリーにおける検索誘導性忘却の生起については十分検討されていない。

そこで、本研究では、コモンカテゴリーとアドホックカテゴリーにおける検索誘導性忘却の生起について比較検証する。

## 方法

**参加者** 広島大学の学生。コモンカテゴリーでは22名、アドホックカテゴリーでは19名。

**材料** コモンカテゴリーリスト：学習刺激は、月元・川口 (2004) の刺激のうち2つのリスト (各3カテゴリー×6事例の36項目) とフィラー項目 (3カテゴリー×2事例の6項目) を用いた。再生テストではフィラー項目を除く全36項目を用いた。アドホックカテゴリーリスト：田中・中條 (2015) の予備調査で作成されたアドホックカテゴリー事例の生成頻度表を用いて月元・川口 (2004) と生成頻度が同程度になるよう作成したリスト (貞國ら, 2018 (未公開)) を一部改変して使用した。項目数などはコモンカテゴリーリス

ト同様とした。両カテゴリー条件で、参加者ごとに条件を割り当てる事例セットを入れ替え、それぞれリストA、Bとし、材料の効果を相殺した。**手続き** 学習フェイズ：カテゴリー名と事例の対を4秒間ずつ呈示した。検索経験フェイズ：Rp+条件では、3カテゴリーの各3事例についてカテゴリー名と事例の頭二文字の対を手がかりに口頭で再生させた。したがって、Rp+9項目、Rp-9項目、Nrp18項目であった。ディストラクターフェイズ：計算課題を4分間実施した。テストフェイズ：カテゴリー名と事例の頭文字の対を手がかりに再生を求めた。刺激呈示、実験制御にはSuperLab4.5を用いた。

## 結果と考察

平均正再生率は以下ようになった (Table 1)。

Table 1 各条件の平均正再生率 (%) と標準偏差

	Rp+	Rp-	Nrp
コモンカテゴリー全体	64.1 (0.17)	51.0 (0.21)	44.7 (0.12)
リストA	54.5 (0.16)	63.6 (0.17)	42.9 (0.12)
リストB	73.7 (0.11)	38.4 (0.18)	47.5 (0.13)
アドホックカテゴリー全体	86.0 (0.12)	60.8 (0.20)	70.4 (0.17)
リストA	85.9 (0.12)	71.7 (0.17)	73.4 (0.17)
リストB	86.1 (0.13)	45.8 (0.13)	66.3 (0.15)

一要因の分散分析の結果、コモンカテゴリーでは主効果が有意であり ( $F(2, 42)=8.827, p<.001$ , 偏 $\eta^2=.296$ )、多重比較 (Holm法) ではRp+とNrpとの差のみ有意となり、検索誘導性忘却は確認されなかった。アドホックカテゴリーでは、主効果 ( $F(2, 36)=17.072, p<.001$ , 偏 $\eta^2=.487$ ) が有意で、多重比較ではRp+と他2条件間の差は有意であったが、Rp-とNrpの差は有意ではなく ( $p>.05$ )、検索誘導性忘却は確認されなかった。

両カテゴリーで正再生率がリスト内容に依存していることが示唆されたため、リストごとに一要因分散分析を行ったところ、全リストで主効果が有意となった。多重比較の結果、検索誘導性忘却はアドホックカテゴリーの2リストの一方のみで確認できた ( $p<.05$ )。このことから、アドホックカテゴリーにおいても検索誘導性忘却が生じることが示唆された。また、検索誘導性忘却の生起はリスト内容に依存することが示唆された。